

出張報告

報告日

令和3年12月2日

会派名	柏崎の風
報告者氏名	阿部 基、星野 正仁、柄沢 均、山本 博文、白川 正志、田邊 優香
種別	■調査研究（□行政視察） □研修会 □要請・陳情 □各種会議
用務	東日本大震災・原子力災害伝承館、震災遺構浪江町立請戸小学校
日時	令和3年11月18日(木)14時～17時・11月19日(金)9時～11時
場所 (会場)	福島県双葉郡双葉町、双葉郡浪江町
調査項目等	津波や原子力災害で被災した施設の現状及び復興について
概要	<p>○東日本大震災・原子力災害伝承館</p> <ul style="list-style-type: none"> ・施設内にて、画像や写真、現物による災害発生時や避難時の説明 ・車窓から立ち入り困難地域の現状説明 ・地域住民の語り部■■■■氏による震災時の講話  <p>○震災遺構浪江町立請戸小学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・震災時状況で残る請戸小学校内の見学 ・大地震、大津波の避難状況の説明 

所 感 等

【阿部 基】

・東日本大震災、原子力災害で被害を受けた双葉町、浪江町を視察させて頂き、災害の大きさを改めて痛感しました。10年9ヶ月が経過していますが、未だにある立ち入り困難地域を目に焼き付けるとともに、除染や新たな工業団地など、復興が進む状況も確認できました。また、地域住民の語り部である■■■■氏より講話をして頂き、震災時の苦悩を学ぶことができました。福島現状や記録、記憶を教訓として、柏崎市民の命と暮らしを守る、防災に結び付けられるよう、研究してまいります。

【星野 正仁】

・伝承館を見学し私自身震災後約十年が経過し記憶が薄れてきていました。しかしこの伝承館、語り部の方の話を聞いてあらためて地震・津波・原子力災害と言う類を見ない複合災害であったこと。今尚帰宅できない現実など見て聞いてきました。この経験は他人事ではなく自分事として考え、学び教訓を生かすことが大切と感じました。今後は災害への備え、減災、命を守ることを語り継いでいくことの大切さを学びました。今後の活動に生かしていきます。

【柄沢 均】

・大地震、大津波そして複合災害についての当時の状況、そして現在の復興状況を確認した。東日本大震災から10年たった今、改めて災害の大きさを痛感させられた。津波から全員が避難することができた請戸小学校での教職員や児童の判断力と行動力からは、日常での問題意識の持ち方とまちをよく知ることが大切であること、語り部講話による愛犬との奇跡的な再会の話からは、日常の取り戻しには災害時でのペットの保護について考える必要もあると感じた。災害は止められないが備えはできる。しっかりとした対策を築いていきたい。

【山本 博文】

・東日本大震災・原子力災害伝承館では「地震・津波・原子力災害という複合災害」による影響、復興の現状、課題を考えて、他人事ではなく自分事として考えるように説明を受けました。また、フィールドワークでは説明者が同乗して説明や解説を行いながら、車窓から立ち入り困難地域の見学を行いました。最後に、東日本大震災時に浪江町立請戸小学校の教員をしていた語り部の講師から奇跡的に児童、教職員93人が全員無事に避難することが出来たお話を聞きました。

・翌日に災害遺構の浪江町立請戸小学校を見学させていただきました。今回お聞きした事や見てきた事を柏崎市の災害対策に役立てて行きたい。

【白川 正志】

・新潟県原子力災害広域避難計画に基づく避難訓練における現場視察経験との差異を肌で感じることを主な目的として視察。伝承館：複合災害において時系列で避難や対策の優先順位を明確にし、家族や職場で共有しておく必要性を痛感。請戸小学校：地

震＝津波発生を予測した近隣住民による声かけ、それに対する現場の先生たちの決断力、避難経路の選択に児童の助言を受け入れた感性が奇跡を生んだと知り、準備・対策だけではなく瞬時に命を守る選択ができる実体験の必要性を提案していきたい。

【田邊 優香】

・東日本大震災・原子力災害伝承館では、「地震・津波・原子力災害」という世界で類を見ない複合災害であり、展示物や写真から想像を絶する事態だったという事を改めて痛感してきました。そして何より、災害は他人事ではなく、自分事として捉えることが大事だと感じました。10年経過してもなお帰還困難区域として位置づけられる地区もあるなか、復興に向けて挑戦する姿は勇気づけられるものがありました。今回の視察をもとに今後の災害対策や防災に結びつけ、今後の活動に生かしていきたいと思います。